

わがまち歴史散歩

小林一三が間近に見た大都市空襲の惨状

戦争と『小林一三日記』

小林一三は「日記を書く人」と知る人は多いだろう。だが、彼を紹介するとき多く語られるのが箕面有馬電気軌道の開設、ターミナル型百貨店の開業、郊外住宅地の開発、あるいは宝塚歌劇の開業などであったことも間違いない。そのためか、第一次世界大戦で戦場となったヨーロッパやそこに暮らす人々がなめた苦しみをよそに、基本的には平和と繁栄を享受した日本で、デモクラシーの状況下人生を切り開いていった人物という印象で語られることが多い。

だが、第二次大戦中、戦後期の『小林一三日記』（発行・阪急電鉄株式会社、制作・文藝春秋、1991年）では、彼は自分の見聞を大事にし、日本と世界の動向に気を配り、戦争の実相や国家指導に興味を示していた。その内容は、敗戦に至る戦争指導の過程や戦後国政の動きを中心にさまざまな記述であふれ、その量も半端なものではなかった。小さな活字を使い、昭和20（1945）年だけでも、A5版2段組にして338ページに及ぶのである。戦争は彼の人生に大きな意味を持つ存在となっていた。

ここでは、空襲、なかでも大都市を爆撃した大空襲の実況を見聞して、戦争というものの悲惨さを感じ始めていった心の動きを紹介しておこうと思う。

3月東京・名古屋・大阪大空襲の体験と空襲観の形成

昭和20年3月8日小林一三は戦争について、「勝ねば駄目だ、勝つためには一億一心、今日までのイデオロギーを捨て、軍官民一致、真剣になり得る国内体勢を、一日も早く樹立なし得る内閣が出来なければ駄目だ」とし、「誰れでもよい、毅然としてにらみのきく、戦争第一主義を敢行し得るエライ人はないだらうか」と記していた。

その2日後の3月10日朝、彼は大阪を出発した。10日夜には東京に到着し、11日午前に再開する議会（貴族院）に出席するためであった。ところが、その直前、9日深夜から10日未明まで東京は米軍の誇る「超空の要塞」B29の大編隊による無差別爆撃を受けていた。

東京空襲時、彼はまだ大阪にいた。そして朝早いラジオを聞いていた妻から「東京はB29編隊百三十機の盲爆にて大混雑」との情報を得ていた。しかし、その悲惨さ・激烈さは具体的に

はなかったようである。

実は今もって正確な数は分からないのだが、この日の東京大空襲は死者10万人と言われる、世界戦史上でも大惨事であった。それは科学技術が発達した現代の戦争においては前線のみならず後方の一般市民にも広く惨禍が及ぶという、世界中の人が忘れてはならない出来事の典型事例であった。

彼が、東京はひどいことになっていると知ったのは、列車を降りて、定宿の箱根のホテルに到着して東京が関東大震災などよりも「ドエライ」焼野原になったと聞いた時であった。おそらく、大正12（1923）年

9月の関東大震災は、当時の日本人が大惨禍として思い描ける被害の程度の基準となっていたのだろう。彼は話を聞いて「驚いた」と記している。

彼は、翌11日午後、東京駅から議会への行き帰りに焼跡の惨状を見て、「聞くなる」と感想を述べる。また、米軍の焼夷弾攻撃のすさまじさを「東京盲爆の惨状」として詳しく記録している。「東京駅の停車場には老嫗を背負ふ避難民の可愛

そうな一群れ」、「汽車の中では泣声の婦人連に遇ふ」、「何といふ憐れな光景」と記すのである。そこには関東大震災以上の惨状に驚くひとりの日本人がいた。

12日にはラジオで11日の名古屋爆撃を知ってそのひどさを想像し、13日深夜から14日未明にかけての大阪大空襲は帰宅したばかりの池田の自宅から望見することとなった。こうしてこの旅は、小林一三にとって空襲の猛烈さと悲惨さの認識を具体化する旅となったのである。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）
問合 歴史民俗資料館

☎751・3019



大阪大空襲後の戎橋北詰の東側から対岸のアドビル、松竹座などを見る（なにわ堀江1500提供）